

## 〈研究報告〉

## 音楽科における異校種間連携に関する研究

## —小・中・高校教員へのアンケート調査の実施とその報告を中心に—

渡辺亜希子 長野県小諸高等学校

舞澤典子 長野県上松町立上松小学校

中山裕一郎 信州大学教育学部芸術教育講座

キーワード：音楽科教育，連携，アンケート

## 1. はじめに

小学校及び中学校の音楽教師の集まりで、こんなことが話題にのぼることが多い。小学校の教師はこのように言う。「小学校時代にはあんなに生き生きと大きな声で歌っていたのに、久しぶりに中学校の文化祭で子どもたちの歌声を聞いたら、声も表現もやせ細っている。いったいどうしたことなのか？」と。一方の中学校の教師もこう言い返す。「小学校段階で身につけているはずのことが少しも出来ていない。基礎がないので、指導に大変苦労する。」と。また、こんな話も耳にする。中学生にある教材を手渡すと、「それ、もう小学校でやった。別のにして。」という返事が返ってきたとのこと。

小学生と中学生とでは、身体的にも、心理的な側面においても異なる点が多い。中学生になって声を出さなくなるのは、心理面や所属する学習集団の質や風土にも大きく影響される。単に指導法上の問題ばかりとは言えないだろう。しかし、中学校で声を出さなくなる理由が、小学校での経験の中にある場合ももしかしてあるかも知れない。「校内合唱コンクールのために、同じ歌ばかり何ヶ月も歌わされ、嫌になった。」という子どもの声も聞いたことがある。また、小学校段階で十分な基礎力がついていないとすれば、その原因はどこにあるのか。これらについても、校種をこえて一緒に考えてみる必要があるのではないだろうか。

教材の提示についても同様である。人間の成長は直線的ではない。むしろスパイラルな学習経験の中で多くのことを深く学ぶ。だから、小学校で接した教材を中学校で再び取り上げることもあり得る。同じ教材を使用しても、やり方によっては前回とは異なった学びに到達することもあるはずだ。しかしながら、我々が顧慮しなければならないことは、子どもたちの学びの過程全体に対する見通しと洞察ではないだろうか。個々の授業は、基本的に、学びの過程全体の中の一過程として位置づけられなければならない。小学校課程における学びは幼稚園課程或いは保育園課程での学びとの連携の中で、さらに中学校課程との連携の中で位置づけられなければならない。さらに、個々の校種における学びは、一人の学習者のライフコース全体の中に位置づけられ、その視点から教育内容や方法が吟味さ

れなければならないはずである。校種を越えて同じ教材が用いられたとしても、そこには十分な理由がなくてはならない。時間は限られている。ここでもっとも重要なのは、異なった校種間の情報の共有と連携に他ならない。学びの過程全体を見通すための校種間の連携である。

本研究は、以上の視点を踏まえた上で、小・中・高校の各校種における音楽科（高等学校では芸術科音楽）担当教員の授業観の持ち方と、校種間連携に関する意識の実態を明らかにしようとするものである。調査はアンケートによっておこなった。今後の連携のあり方への議論の出発点として位置づけたいと考えている。

## 2. アンケート調査とその結果の分析

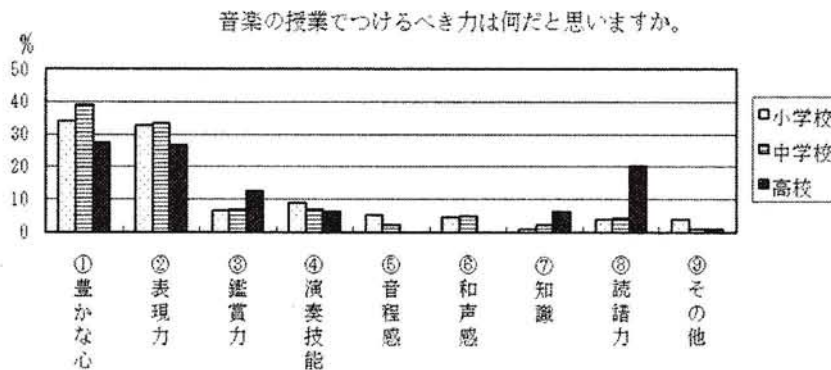
### ＜調査データ＞

- ①調査時期 平成20年5月～6月
- ②調査対象 長野県内の小・中・高校の音楽担当教員
- ③調査数 各校種60校ずつ、計180校を無作為に抽出
- ④回収率 小学校38.3% 中学校41.7% 高等学校33.3%

### 2.1 授業に向けられた意識について

音楽の授業でつけるべき力をどのように捉えているのか質問した結果は以下の通りである。回答は、上位3つに順位をつけるという方法をとった。それぞれの順位については、順位の高い回答が量的に大きくなるように、1位には3倍、2位には2倍、3位には1倍を乗じて計算し、その数を合計した。各校種での回答数が異なるため、グラフ上ではそのパーセンテージを示している。

(グラフ1)



全体としては「①豊かな心」「②表現力」を重視する傾向が強いことがわかった。また、小・中学校の教師の場合、①②以外の項目はほぼ同じ割合であるのに対し、高校の教師では①②の割合が小・中学校ほど多くはない。その一方で、「③鑑賞力」「⑦知識」「⑧読譜力」を重視する傾向にある。とくに「⑧読譜力」については、小・中学校の教師と比較し大きな差異が見られた。また全体的に「⑤音程感」や「⑥和声感」が低い割合になっているが、これは、「②表現力」の中に含めて捉えている可能性が考えられる。また、高校の教師からは⑤⑥に対する回答数がまったく得られなかったが、これも同様に、②に加え、「③鑑賞力」「④演奏技能」及び「⑧読譜力」中に含めて回答した結果ではないかと考えられる。

次に、教師自身の音楽に対する関心や態度の持ち方或いは日常的な接し方について質問した。このことは、教師の教材観や授業観や学習領域への時間配分の取り方などに影響するであろうと考えられるからだ。

結果(グラフ2)は、どの校種においても「②アンサンブルをしているとき」が最も多かった。また、「①独奏・独唱をしているとき」と「③人前で演奏をしているとき」とを比較すると、小学校及び高校の教師は①の方により多く回答している。③については、一番回答数の多かった中学校でさえ、14.9 パーセントという数値にすぎない。「表現教科」として音楽科が語られることが多いが、仮にその「表現」が他者の存在(聴き手)を前提とするものであるなら、教師自身はそのような「表現」とは別の方向での楽しみを享受していることになる。鑑賞に関しては、生で聴く場合と、機器を通して聴く場合とで、回答に大きな差異が見られた。上記の質問1での「③鑑賞力」に関する意識のあり方と絡めて、鑑賞の授業のあり方について考察を深める必要性を感じる。また「⑥創作をしているとき」については、3校種ともに数値は低い。「創作」の専門性が高いと感じられているのか、楽しむ対象とはなっていないようである。「⑦音楽理論を学んでいるとき」に関しては、小・中学校と高校とでは大きな開きがある。「音楽理論」の具体的な内容については不明であるが、高校の教師たちが、音楽を支える理論や背景に、他の2校種の教員よりも多くの関心を寄せていることが分かる。年齢の高い高校生を対象とする授業に日常的に取り組んでいることとも関連があるのではないかと考えられる。

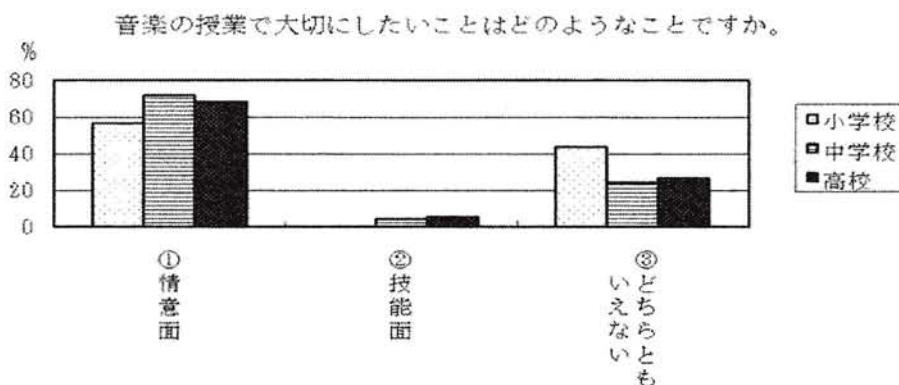


(グラフ 2)



次に、音楽の授業で何を大切にしたいかについて質問した。結果は、3校種ともに「①情意面」を重視する回答が「②技能面」を圧倒した。中でも中学校は72.0パーセントという高い数値を示している。それに対し「②技能面」重視の回答は3校種ともに低く、小学校においては回答数がゼロである。一方で、「③どちらともいえない」という回答も、3校種ともに20～45パーセントの範囲の中にある。「①情意面」或いは「②技能面」の一方に明確に答えることに対する回答者の躊躇いのようなものが見てとれる。教師たちの多くが、情意面の育成を優先、或いは、技能の学習を通して情意面の育成を図りたいと望んでいると言えるのではないだろうか。但し、限定された授業時数の中で、教師はその指導内容に優先順位をつけざるを得ない。「技能面」の学習が、傍らの方へ押しやられて行ってしまう可能性もないとは言えないだろう。

(グラフ 3)



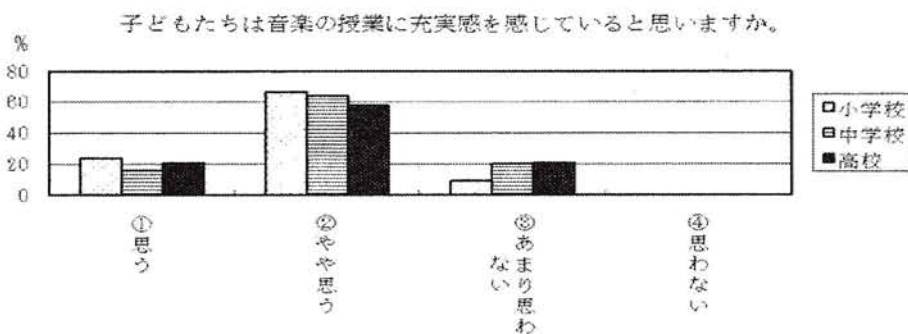
次に音楽担当の教師たちが、授業に対する子どもたちの満足度についてどのように捉えているのか質問を行った。どの校種でも「②やや思う」が最も多く、「①思う」とあわせる

と小学校では90.5パーセント、中学校では80.0パーセント、高校では79.0パーセントという高い数値になった。「④思わない」は3校種ともにゼロの回答であった。少なくとも教師たちは自身の授業実践について子どもたちの評価を得ていると考えている。

この点に関しては、教師の側だけへの調査だけでなく、子どもたちの側に向けた調査と回答も必要であろう。たとえば平成18年度に長野市の小中学生を対象に行った市教育センターの調査では、音楽は嫌いな教科として第4位に挙げられている。小5、小6、中2を取り出しての全数調査であるが、各学年26パーセント、25パーセント、29パーセントの子どもたちが「嫌いな教科」として音楽科をあげている。いずれも「好きな教科」としての回答数を上回っている。授業の充実感についての小6と中2の子どもを対象にした調査結果もある。小6では「感じることが多い」と「たびたび感じる」を合わせると68パーセント、同様に中2では48パーセント。一方、「あまり感じていない」と「まったく感じていない」を合わせた回答では小6で33パーセント、同様に中2では53パーセントという高い数字を示している。同調査結果に付されたコメントには、「肯定的回答が、70パーセントを越えたのは、小6では音楽、道徳を除いた教科等、中2では数学、保健体育であった。」と書かれている(1)。

教師側と子どもたちの思いとの間には、かなりの差異があると言えるのではないだろうか。

(グラフ4)



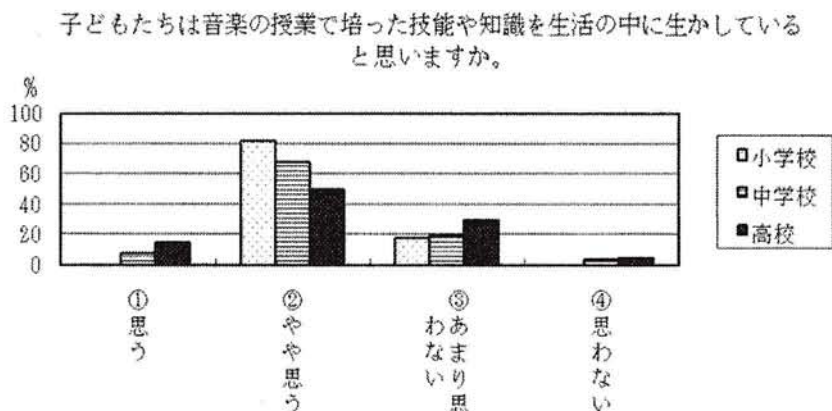
次は教師たちが自身の授業実践を通して培われた音楽的な力が子どもたちの実生活の中にどう生かされていると考えているのかについての質問である。回答の結果は下記の通りである。(グラフ5)

結果、「②やや思う」がどの校種でも多かった。しかし、その割合には差異が見られる。小学校で81.8パーセント、中学校で68.0パーセント、高校で50.0パーセントの教師が「②やや思う」と回答している。

また、「①思う」の回答が小学校でゼロだったのに対し、高校では15.0パーセントという割合を占めている。①②をあわせると、小学校では81.8パーセント、中学校では76.0パーセント、高校では65.0パーセントの教師が、授業での学びが子どもたちの校外での音

楽活動や音楽生活に何等かの役割を果たしていると考えている。一方で、「③あまり思わない」と「④思わない」の回答をあわせると、小学校で18.2パーセント、中学校で24.0パーセント、高校で35.0パーセントという結果となっている。小学校では5分の1、中学校では4分の1、高校では実に3割以上の教師たちが、授業における学びが、子どもたちの実生活につながり広がっていったという実感を持っていない。

(グラフ5)

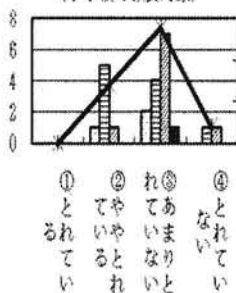


## 2.2 校種間連携に関する意識

次に、それぞれの校種間での連携について質問を行った。この連携には意識上のそれも含む。具体的行動としての連携だけでなく、ある校種の教師が、他の校種の教科書や学習指導要領や子どもたちの実態について関心を有しているかどうかについても含め質問を行った。その結果は以下のグラフの通りである。なお、示されている年数は、教員経験の年数である。

(グラフ6-1)

中学校の音楽教員と連携はとれていますか。  
(小学校の教員対象)



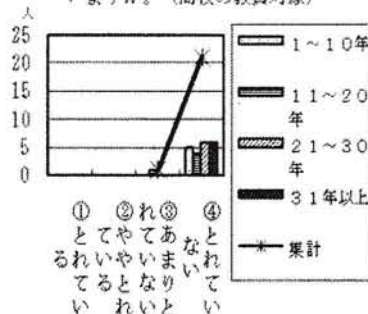
(グラフ6-2)

小学校の音楽教員と連携はとれていますか。  
(中学校の教員対象)



(グラフ6-3)

小学校の音楽教員と連携はとれていますか。  
(高校の教員対象)

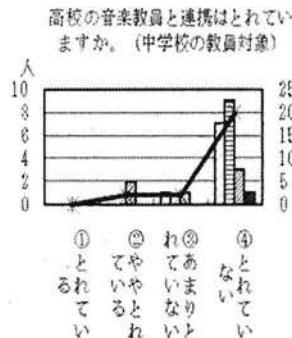




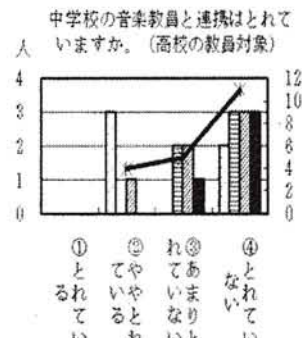
(グラフ 6-4)



(グラフ 6-5)



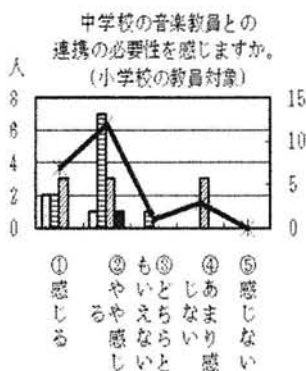
(グラフ 6-6)



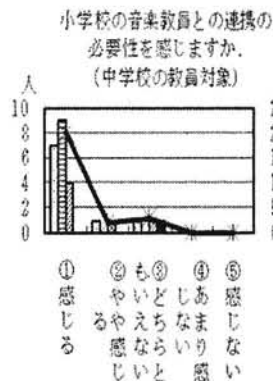
この結果、3校種間の連携がほとんどとれていない実態が浮き出てくる。小・中学校のような隣接する校種間ですら「③あまりとれていない」という回答がもっとも多い。小・中学校の高校との連携に至っては、ほとんどなされていないことが分かる。

次に、それぞれの校種間において連携の必要性を感じるかについての質問を行った。結果は以下の通りである。

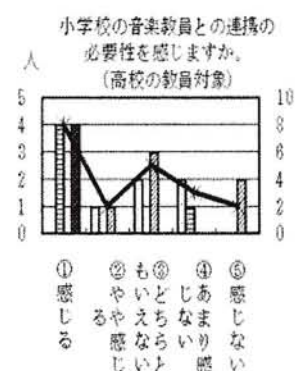
(グラフ 7-1)



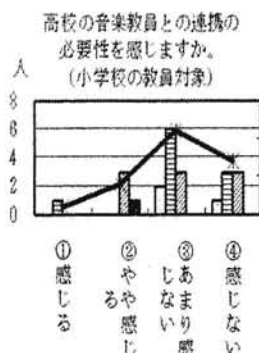
(グラフ 7-2)



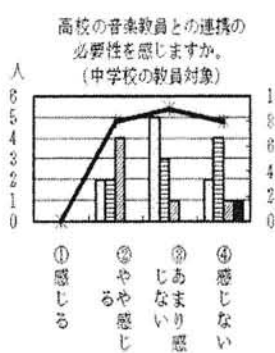
(グラフ 7-3)



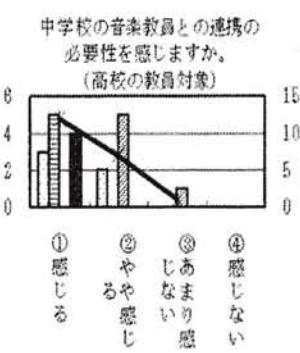
(グラフ 7-4)



(グラフ 7-5)



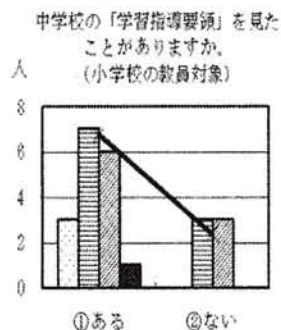
(グラフ 7-6)



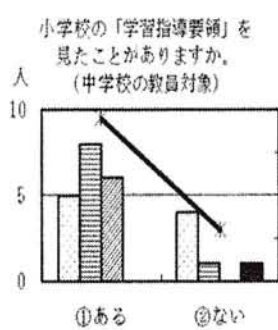
以上のように、小・中学校の教師は互いに連携の必要性を感じ、高校の教師は中学校或いは小学校に対して一定の連携の必要性を感じている。しかしながら、グラフ (7-1) (7-4) (7-5) のように、小学校の教師は中学校或いは高校に対して、中学校の教師は高校に対し、連携の必要性をあまり感じてはいない実態が見える。義務教育課程の教師たちはそこでの実践が忙しく、その後の子どもたちの成長を顧慮する余裕などないというのか。それとも、自分の受け持ち段階の仕事はしっかりこなしたなら、その後のことには関心がないというのだろうか。だが、教育とは言わばゴールに対するイメージが不可欠ではないのだろうか。最終的に目指すある地点に向かって、それぞれが必要な学びを子どもたちに与えるべきではないのだろうか。

次に、連携の具体的な内容についての質問である。他の校種の「学習指導要領」について、これまでに見たことがあるかどうか調査を行った。結果は以下の通りである。

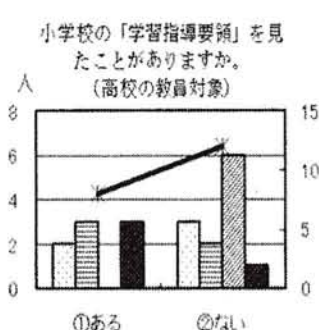
(グラフ 8-1)



(グラフ 8-2)

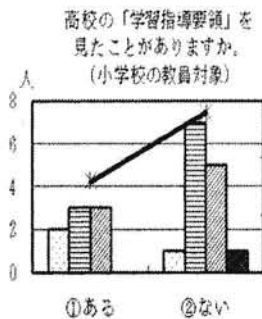


(グラフ 8-3)

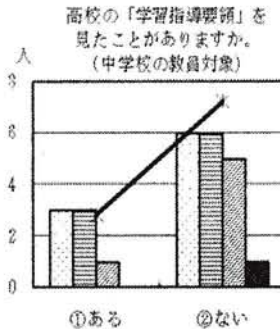




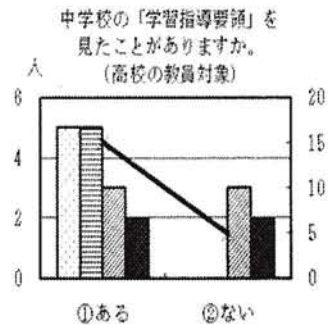
(グラフ8-4)



(グラフ8-5)



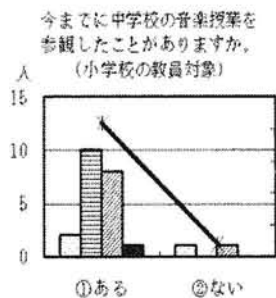
(グラフ8-6)



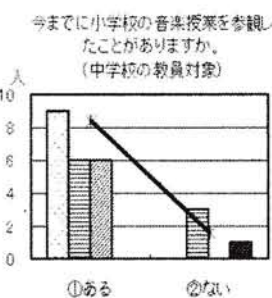
回答から、隣接する校種間では「学習指導要領」を比較的見ていることがわかる。だが、小学校と高校というように、間に他の校種を介した関係においては、互いの「学習指導要領」を見ていない。また、隣接はしていても、中学校の教員が高校の「学習指導要領」をあまり見ていない状況が目につく。制度上、義務教育課程は中学校段階で終了する。また、高校では音楽は必ずしも必修ではない。しかしながら、ほぼ義務化している高校課程についての認識は、小・中学校課程の教師たちにとって必要ではないのだろうか。無論、他校種の学習指導要領の内容を知ることは、連携のための手段の一部に過ぎないが。

次に、それぞれの校種の授業の参観をしたことがあるかどうかについてもたずねてみた。結果は以下の通りである。

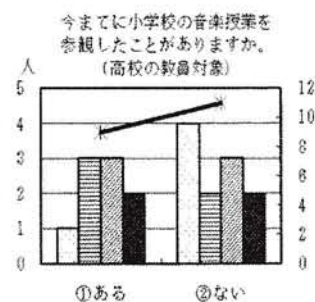
(グラフ9-1)



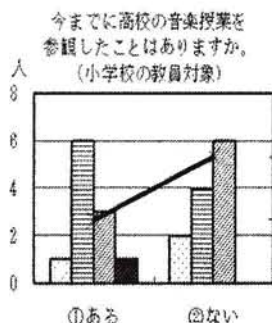
(グラフ9-2)



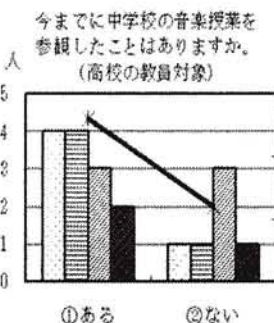
(グラフ9-3)



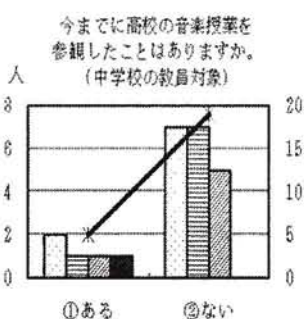
(グラフ 9-4)



(グラフ 9-5)



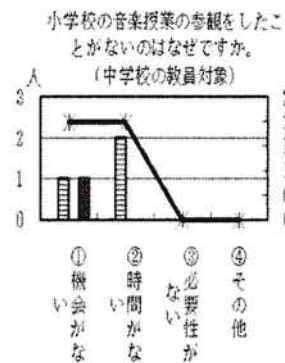
(グラフ 9-6)



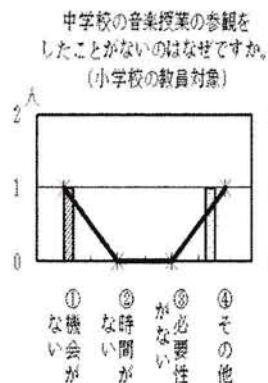
ここでも、隣接する校種間では互いの授業を参観したことがあると多くの回答者が答えている。しかしながら、隣接していると言っても、中学校の教員の多くは高校の音楽の授業を見たことがないと答えている。また、隣接していない小学校と高校では、授業を見るということについての交流はほとんどおこなわれていない。

次に授業参観をしたことがないと答えた回答者を対象に、その理由について質問を行った。以下がその結果である。

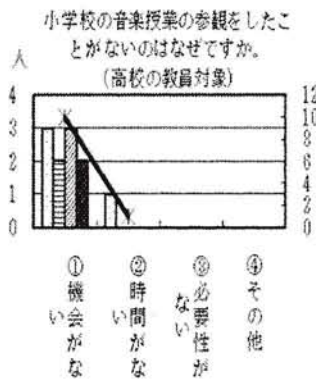
(グラフ 10-1)



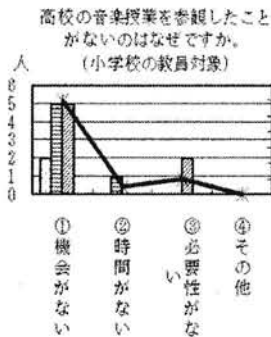
(グラフ 10-2)



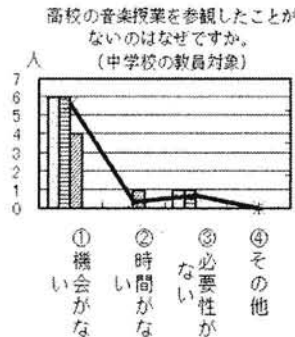
(グラフ 10-3)



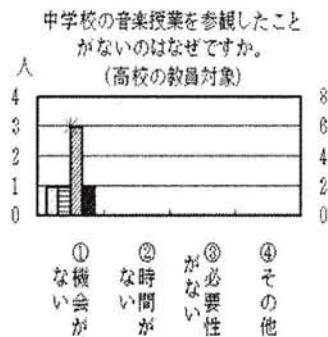
(グラフ 10-4)



(グラフ 10-5)



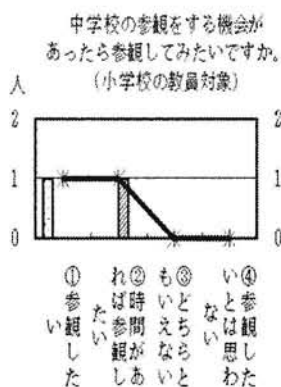
(グラフ 10-6)



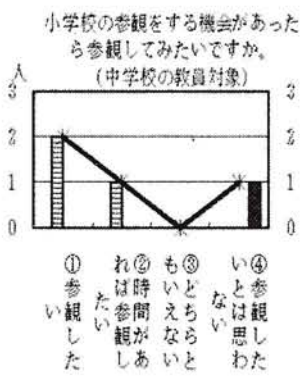
結果から、「③必要性がない」とは考えないものの、「①機会がない」とする回答が最も多くみられた。しかし授業研究会などの機会は校種別ではあるが設定されている。「②時間がない」中での、そういった機会が十分に生かされてはいない実態もほの見える。ただ、参観しにくい状況があるとするなら、その改善は図られるべきであろう。また、高校の授業参観については、小学校教員に加え中学校教員もまた、あまりその必要性を感じてはいない。

次に参観をしたことがないという教員を対象に、参観できる機会があれば参観をしたいか、という点について質問を行った。回答結果は以下の通りである。

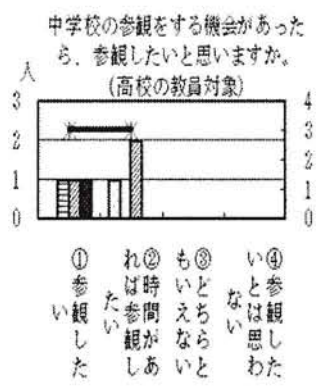
(グラフ 11-1)



(グラフ 11-2)

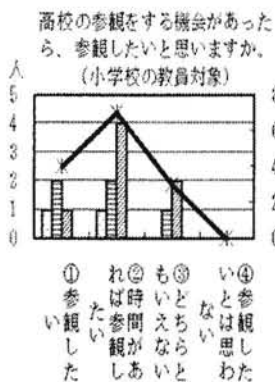


(グラフ 11-3)

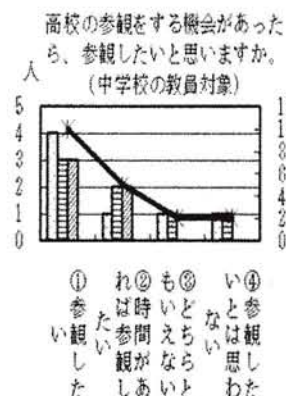




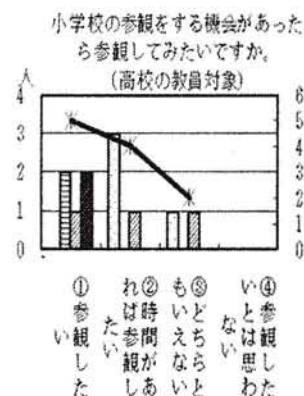
(グラフ 11-4)



(グラフ 11-5)



(グラフ 11-6)



どの校種でも、「①参観したい」或いは「②時間があれば参観したい」という回答が多かった。グラフ (11-5) では、高校への関心があり見られなかった中学校教員の多くが、そのように回答している。高校の教員も、小・中学校に対してはほぼ同様の回答をおこなっている。

### 3. おわりに

今回のアンケート調査により、音楽の授業に対する各校種における教師の意識、教師の校種間連携に対する意識の実態の一端が明らかになった。またその意識のあり方についても、校種を異にした教員間で大きな差異のあることが分かった。連携や交流の必要性自体について感じていないという回答も多かった (2)。授業や日常の業務に忙殺される中、他の校種へ意識を振り向ける余裕がないということでもあるのだろうか。しかし、この問題は個々の教師の問題にだけに帰して済まして良いわけではない。交流や連携の進むような制度設計も必要ではないか。たとえば千葉県八街市の小・中学校では、組織を作って交流や連携に取り組み、大きな成果を挙げているという (3)。

一人の人間の学びの過程は、本来連続的である。小・中学校義務教育課程 9 年間における一貫した流れと、最終的に子どもたちにどのような音楽的学力を保証していくのかという目標が共有されていなければならないはずである。それ故に、校種間の交流と連携は必要である。

アンケートを実施し分析し考察する中で感じられたことは、このアンケートの実施それ自体にも重要な意味があったのではないかと言うことである。教員はその忙しい日常の中、明日の授業を考えることで精一杯かも知れない。だが、ものごとを別の視点から意識的に眺めてみることも必要ではないだろうか。もしかすると、そのためにも、このアンケートは何かの意味を持ったのではないかと考える。アンケートのサンプル数や回答数、設問

などにはまだ不十分な点も多い。だが、このようなアンケートの結果をもとに、校種間連携の意識の共有を多くの教員たちと図っていくことが出来ればと考えている。

最後に、学校での日々の仕事に忙殺される中、今回のアンケートにご協力いただいた多くの諸先生各位に、この場を借りて深謝申し上げたいと思う。

#### 注

- (1) 「平成18年度長野市立小中学校生活学習意識実態調査結果」『長野市教育センター便り』146号, pp.3-4, 2006.9.4
- (2) 一方で、高校の教師からの回答の中には、「小・中・高一貫の情意面・技能面のシラバスが必要だと何年も前から思っていました。」といった、連携の必要性を積極的に訴える意見もみられた。
- (3) 雑誌『教育音楽』では、1998年と2003年に小学校と中学校の連携に関する特集を組んでいる。2003年4月号では連携に取り組んでいる千葉県八街市立笹引小学校・二州小学校・川上小学校と八街南中学校を取り上げ、その成果について報告している。

#### 参考文献

- 草野ひろ子, 相田益美, 富永美栄子, 千葉葉子「小・中9年間で考える音楽科教育」『川崎市総合教育センター研究紀要』第19号, 2005
- マーセル, ジェームス・L. 「学問的背景の中の音楽教育における成長の過程」(ネルソン・ヘンリー編/美田節子訳『音楽教育の基本的概念』所収) 音楽之友社, pp189-218, 1986
- 『教育音楽小学校版』(「一小・中横断企画」特集 音楽教育における小学校と中学校の連携を考える) 音楽之友社, 1998. 7
- 『教育音楽中学・高校版』(「中学特集～小・中横断企画～音楽教育における小学校と中学校の連携を考える」) 音楽之友社, 1998. 7
- 『教育音楽中学・高校版』(「中学特集 もっともっと進めたい! 小中連携」) 音楽之友社, 2003. 4

(2009年3月3日 受付)

(2009年4月7日 受理)